



小倉百人一首

25	名にしおはば逢坂山のさねかつら	人に知られて来るよしもがな	藤原定方
24	このたびは幣も取りあへず手向山	紅葉の錦 神のまにまに	菅原道真
23	月見れば千々に物こそ悲しけれ	我が身ひとつの秋にはあらねど	大江千里
22	吹くからに秋の草木のしをるれば	むべ山風を嵐といふらむ	文屋康秀
21	今来むと言ひしばかりに長月の	有明の月を待ち出でつるかな	素性
20	わびぬれば今はた同じ難波なる	身をつくしても逢はむとぞ思ふ	元良親王
19	難波瀉短き芦のふしの間も	逢はてこの世を過ぐしてよとや	伊勢
18	住の江の岸による波よるさへや	夢の通ひ路人目よくらむ	藤原敏行
17	千早ぶる神代も聞かず竜田川	からくれなゐに水くくるとは	在原業平
16	立ち別れいなばの山の峰に生ふる	まつとし聞かば今帰り来む	在原行平
15	君がため春の野に出て若菜摘む	わか衣手に雪は降りつつ	光孝天皇
14	陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに	乱れ初めにし我ならなくに	源融
13	筑波嶺の峰より落つるみな川の	恋ぞつもりて淵となりぬる	陽成天皇
12	天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ	をとめの姿しばしとどめむ	遍昭
11	わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと	人には告げよあまの釣り舟	小野篁
10	これやこの行くも帰るも別れては	知るも知らぬも逢坂の関	蝉丸
9	花の色は移りにけりないたづらに	わが身世にふるながめせしまに	小野小町
8	わが庵は都のたつみしかぞ住む	世を宇治山と人はいふなり	喜撰
7	天の原ふりさけ見れば春日なる	三笠の山に出でし月かも	阿倍仲麻呂
6	鶺鴒の渡せる橋に置く霜の	白きを見れば夜ぞ更けにける	大伴家持
5	奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の	声聞くとときぞ秋は悲しき	猿丸大夫
4	田子の浦にうち出でて見れば白妙の	富士の高嶺に雪は降りつつ	山部赤人
3	足引の山鳥の尾のしだり尾の	長々し夜を一人かも寝む	柿本人麻呂
2	春過ぎて夏来にけらし白妙の	衣干すてふ天の香眞山	持統天皇
1	秋の田のかりほの庵の苫をあらみ	我が衣手は露にぬれつつ	天智天皇
26	小倉山峰のもみち葉心あらば	みかの原わきて流るる泉川	藤原忠平
27	山里は冬ぞさみしきさまさりける	心あてに折らばや折らむ初霜の	藤原兼輔
28	有明のつれなく見えし別れより	朝ぼらけ有明の月と見るまでに	源宗子
29	山川に風のかけたるしがらみは	久方の光のどけき春の日に	凡河内躬恒
30	誰をかも知る人にせむ高砂の	人はいさ心も知らずふるさは	坂上是則
31	夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを	白露に風の吹きしく秋の野は	春道列樹
32	忘らるる身をば思はず誓ひてし	浅茅生の小野の篠原忍ぶれど	紀友則
33	忍ぶれど色に出でにけり我が恋は	恋すてふ我が名はまたき立ちにけり	藤原興風
34	契りきなかたみに袖をしばりつつ	逢ひ見ての後の心にくらぶれば	松も昔の友ならなくに
35	逢ふことの絶えてしなくはなかなか	哀れともいふべき人は思ほえて	花ぞ昔の香に匂ひける
36	由良の門を渡る舟人かぢを絶え	八重葎 茂れる宿のさびしきに	雲のいづこに月宿るらむ
37	風をいたみ岩打つ波の己のみ	御垣守衛士の焚く火の夜は燃え	貫きとめぬ玉ぞ散りける
38	君がため惜しからざりし命さへ	長くもがなと思ひけるかな	人の命の惜しくもあるがな
39	今ひとたびのみゆき待たなむ	いつ見きとてか恋しがるらむ	あまりてなどか人の恋しき
40	人目も草も枯れぬと思へば	置きまどはせる白菊の花	物や思ふと人の問ふまで
41	暁ばかり憂きものはなし	吉野の里に降れる白雪	人知れずこそ思ひ初めしか
42	流れもあへぬ紅葉なりけり	しづ心なく花の散るらむ	末の松山波越さじとは
43	昔も昔の友ならなくに	松も昔の友ならなくに	昔は物を思はざりけり
44	花ぞ昔の香に匂ひける	雲のいづこに月宿るらむ	人をも身をも恨みざらまし
45	貫きとめぬ玉ぞ散りける	人の命の惜しくもあるがな	身のいたづらになりぬべきかな
46	あまりてなどか人の恋しき	物や思ふと人の問ふまで	行方も知らぬ恋の道かな
47	人知れずこそ思ひ初めしか	末の松山波越さじとは	人こそ見えね秋は来にけり
48	昔は物を思はざりけり	人をも身をも恨みざらまし	砕けて物をおもふころかな
49	身も草も枯れぬと思へば	置きまどはせる白菊の花	暁はかり憂きものはなし
50	吉野の里に降れる白雪	しづ心なく花の散るらむ	流れもあへぬ紅葉なりけり

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
契りおきしさせもが露を命にて	憂かりける人を初瀬の山おろしよ	高砂の尾上の桜咲きにけり	音にきく高師の浜のあだ波は	夕されば門田の稲葉おとつれて	寂しさに宿を立ち出でて眺むれば	あらし吹く三室の山のみみぢ葉は	心にもあらでうき世に長らへば	春の夜の夢ばかりなる手枕に	もろとも哀れと思へ山桜	恨みわび干さぬ袖だにあるものを	朝ぼらけ宇治の川霧たえたえに	今はただ思ひ絶えなむとばかりを	夜をこめて鳥の空音ははかるとも	いにしへの奈良の都の八重桜	大江山いく野の道は遠ければ	やすらはで寝なましものをさ夜更けて	有馬山猪名の笹原風吹けば	めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に	あらざらむこの世の外の思ひ出に	滝の音は絶えて久しくなりぬれど	忘れじの行く末までは難ければ	嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は	明けぬれば暮るるものとは知りながら	かくとだにえやは伊吹のさしも草
あはれ今年の秋も去ぬめり	はげしかれとは祈らぬものを	外山の霞立たずもあらなむ	かけじや袖のぬれもこそすれ	芦のまろ屋に秋風ぞ吹く	いづこも同じ秋の夕暮れ	竜田の川の錦なりけり	恋しかるべき夜半の月かな	かひなく立たむ名こそ惜しけれ	花より外に知る人もなし	恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ	あらはれ渡る瀬々の網代木	人つてならで言ふよしもがな	世に逢坂の関は許さじ	けふ九重に匂ひぬるかな	傾くまでの月を見しかな	まだふみも見ず天の橋立	いづそよ人を忘れやはする	雲隠れにし夜半の月かな	今一度の逢ふこともがな	各こそ流れてなほ聞こえけれ	今日を限り命ともがな	いかに久しきものとかは知る	なほ恨めしき朝ぼらけかな	さしも知らじな燃ゆる思ひを
藤原基俊	源俊頼	大江匡房	祐子内親王 家紀伊	源経信	良暹	能因	三条天皇	周防内侍	行尊	相模	藤原定頼	藤原道雅	清少納言	伊勢大輔	赤染衛門	大式三位	紫式部	和泉式部	藤原公任	高階貴子	藤原道綱母	藤原道信	藤原実方	
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
百敷や古き軒端のしのぶにも	人もをし人も恨めし味気なく	風そよぐならの小川の夕暮れは	来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに	花誘ふ嵐の庭の雪ならで	おほけなく憂き世の民におほふかな	み吉野の山の秋風さ夜更けて	世の中は常にもがもな渚こく	我が袖は潮干に見えぬ沖の石の	きりぎりす鳴くや霜夜のさ庭に	見せばやな雄島のあまの袖だにも	玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば	難波江の芦の仮寝の一夜ゆゑ	村雨の露もまた干ぬ植の葉に	嘆けとて月やは物を思はする	よもすがら物思ふころは明けやらで	ながらへばまたこのころや忍ばれむ	世の中よ道こそ無けれ思ひ入る	思ひわびさても命はあるものを	ほととぎす鳴きつる方を眺むれば	長からむ心も知らず黒髪	秋風にたなびく雲の絶え間より	淡路島通ふ千鳥の泣く声に	瀬を早み岩にせかるる滝川の	わたの原こぎ出でて見れば久方の
なほあまりある昔なりけり	世を思ひゆるに物思ふ身は	みそぎぞ夏のしるしなりける	焼くや藻塩の身もこがれつつ	ふり行くものは我が身なりけり	我がたつ袖に墨染の袖	ふるさと寒く衣うつなり	あまの小舟の綱手かなしも	人こそ知らね乾く間もなし	衣片敷ひとりかも寝む	ぬれにぞぬれし色は変はらず	身ををつくしてや恋ひ渡るべき	霧立ちのぼる秋の夕暮れ	かこち顔なるわが涙かな	閨のひまさへつれなかりけり	憂しと見し世ぞ今は恋しき	憂きに堪へぬは涙なりけり	山の奥にも鹿ぞ鳴くなる	ただ有明の月ぞ残れる	乱れて今朝は物をこそ思へ	もれ出づる月の影のさやけさ	幾夜寝覚めぬ須磨の関守	われても末に逢はむとぞ思ひ	雲居にまがふ沖津白波	藤原忠通
順徳天皇	後鳥羽天皇	藤原家隆	藤原定家	西園寺公経	慈円	飛鳥井雅経	源実朝	二条院讃岐	九条良経	股富門院大輔	式子内親王	寂蓮	西行	俊忠	藤原清輔	藤原俊成	藤原敦頼	徳大寺実定	河	待賢門院堀	藤原頼輔	崇徳天皇	藤原忠通	